

Title	カフカのアフォリズム(1)
Sub Title	Kafkas Aphorismen
Author	黒岩, 純一 (Kuroiwa, Junichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.287(160)- 300(147)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0300

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カフカのアフォリズム (1)

黒岩 純一

カフカのアフォリズムはこれまで彼の文学の中で特殊な位置を占めてきた。長編小説、短篇の物語、あるいは短い散文についてはさまざまな視点から多くの解説がなされてきたが、アフォリズムは折にふれて言及されることはあっても、まとまったかたちで解釈されることは稀であった。早い時期の論文ではF・ヴェルチュの1954年に発表された研究¹⁾があり、短いカフカの中心テーマが的確に指摘されている。F・バイスナーのアフォリズム²⁾解釈も明解である。アフォリズムだけを本格的に扱った著作としては、筆者の知る限り、わずかにヴェルナー・ホフマンの2冊の著作があるだけである。この2冊は³⁾いずれもユダヤ神秘主義とカフカとの関連を詳しく扱っており、カバラにたいするカフカの関係など教えられるところが多い。カフカを信心深いユダヤ人、あるいは無神論者と規定する前にテキスト全体との関わりにおいて、ひとつひとつのアフォリズムを観察することが必要であろう。

一般にアフォリズムと規定されるものは、1917/18年に書かれた『罪、苦悩、希望、真実の道についての考察』と1920年の手記<彼>があり、これに日記のなかに書かれたメモ (T.541)、および『田舎の婚礼準備』のなかに入っている若干のテキストが加わる。(H.281f.;418-421) この二つのシリーズのタイトルもアフォリズムという名称もカフカ自身によるものではなく、マックス・ブロートによって命名されている。最初の作品群は1917年10月から翌年2月までに成立し、カフカの残した八冊の八つ折版ノートの第三冊、第四冊のなかにメモされたが、特に彼の世界観を示すものが多い。

1917年12月、カフカがチューラオ（保養地として知られるカールス・バートの東50キロに位置する小村）の孤独のなかでこれを書いていたとき、彼はブロートに語っている。「ぼくがしなければならないことは、一人でのみできることだ。それは最後のものを明らかにすることだ。」(MB. 145)

それはW. エムリッヒのいう「普遍的テーマ」ではなく、人間と神との関係、そして（有限の）時間と永遠の時の流れのなかの生との関係を問う、古いが同時につねに新しい宗教的な問いであった。

一 咯血

アフォリズムは、1917年晩夏、カフカが経験した重大な危機に際しての自己省察の結果として生れている。8月初め、水泳学校で初めて血を吐いた彼は8月10日早朝、肺からの出血を経験する。それは10分以上も続いた。(F753;O.39) 友人M. ブロートに強く促されて医者を訪ねるが、その結果、「肺炎カタル」と診断される。容易に結核に進行する可能性があった。しかし一方ではこれが彼を仕事から、そしてまたフェリツェとの婚約の重圧から解放することになった。9月、転地療養のため妹オットラのいるチューラオへ移った彼はこの地に8ヶ月滞在することになる。(F. 771)

カフカはこれまで「書くこと」は彼の見せかけの生活を釈明するものだと考えてきた。しかし、もはやその釈明は彼を満足させない。彼は病気により、また絶望によって脅やかされた彼の生活にたいして信仰の基盤を探し求める。

そこでチューラオではキルケゴール、ユダヤの哲学者マイモニデス、マルティン・ブーバー、あるいはトルストイに没頭する。ブロートとの文通、あるいはカフカが関係した雑誌や書物から、カフカのユーデントゥームとの取り組み方も浮び上ってくる。ブロートは“Kafka-Biographie”あるいは自伝“Streitbares Leben”のなかで、またフーゴ・ベルクマンは“Universitas”(1922年7月)のなかでカフカの宗教的発展について述べて

いるが、両者とも、カフカが宗教上の真空地帯のなかで成長したという点で一致している。カフカの若い時代にユダヤ的体験が欠けていたことは、根無しの都会生活によるものだとベルクマンは指摘している。カフカはその欠けていたものを1911年、プラハに客演したイディッシュ語劇団との接触を転機としてインテンシヴに取り戻す。しかしそれによって直ちにユダヤの信仰の世界に接近したとは勿論いえない。彼はユダヤの歴史や文学に関する書物を読み耽るが、宗教的伝説には懐疑的であり、1915年になっても Wunder-Rabbi⁴⁾のもとでの集会を批判して「お話にならない迷信だ」(M.B.137)と述べている。

しかし罪の意識や不安の概念はカフカの意識のなかで問題化する以前、すでに長編小説『審判』(1914)のなかに幽霊の如く出没する。

そして1917年、チューラオにおけるアフォリズムのなかで漸くこれらと思想的に対決することになる。

フェリーツェとの結婚をめぐる戦いにしても実は一人の女性をめぐる戦い以上のものである。つまりこの戦いは生が彼に課する要求との戦いなのである。生を描くように定められてはいるが、生を生きるようには定められていないというような理由づけはもはやカフカには通用しない。彼はこれまで半分寝ていた状態から眼をさまし、これまで予感もしなかった、ましてや理解などできなかった世界という劇場で演じられている事柄を理解しはじめた。まだ遅すぎることはない。オクラホマ自然劇場のように見極めがたいものであっても、またその試みが果して成果を生むものであるのか、それはこの際、構わなかった。彼は考える：「家庭生活、交友、結婚、職業、文学これら一切を挫折させたもの、あるいは挫折するところまでもいかない、その原因は怠惰、意志薄弱、無器用にあるのではなく、大地(Boden)、大気(Luft)、そして戒律(Gebot)が欠けていたからである。これらを入手することこそ、課せられた使命である。」(H.120) 大地、大気、戒律という単語をどう解釈するかについては後に触れたい。

二 不壊なるもの

カフカのアフォリズムには神、魂、不死という単語はほとんど登場しない。そのため、これまで多くの読者、あるいは解説者にあっても時おり、カフカを不可知論者と解釈する判断がみられた。しかし懐疑することはあっても、不可知論者ではない。カフカは彼のアルキメデスの点を発見するために、一切を疑わずにはいられない。そして行きついたものが、アフォリズム50であった。「人間は自分のなかに破壊しがたい何物かがあることをたえず確信していなければ、生きていけない。もっとも、その破壊しがたい何物かも、また確信していること自体も、当人にはいっこう自覚されなくて不明のまま済んでしまうことがある。この不明状態はいろいろな形をとって外にあらわれるが、そのひとつが人格神にたいする信仰である。」(H.44)

この文章を書いているカフカは極めて慎重である。つまり、人間のなかに何か不壊なるものが存在するとは一度も述べられていない。自分のなかにこの不壊なるものにたいする変ることのない信頼の気持がなくては生きていけない、と述べているだけである。しかし人間が自分のなかの永遠なるものにたいする信頼の必要性を意識し、不壊なるものの存在を信じ、この信仰から生きようとすれば、事情は変わってくる。人間は単に生きている状態から存在 (Sein) へと向かうことになる。

このアフォリズムの最後的人格神という単語からW. エムリッヒはカフカにとって「超越的な神」は存在しなかったという結論を引き出している⁵⁾が、この考えは従って否定されるべきであろう。

不壊なるものについてカフカはこうも言う：「信仰とは自己のなかの不壊なるものを解き放つこと、より正しく言えば、自己を解き放つこと、あるいはより正確に言えば不壊であること、更に正確に言えば在る (sein) ことである。」(H.89) “sein” というドイツ語は「存在する」という意味と所有代名詞 “ihmgehören” 「彼のものである」という二つの意味をもつとカフカは書いている。(H.89) “ihmgehören” が意味するところは第三

のノートのメモから明らかとなる。

「至聖 (das Allerheiligste) の場へ足を踏み入れる前に、おまえは靴を脱がねばならぬ、だが靴だけではなく、一切のもの、旅装も荷物も、裸の下の一切のものも、核の核、さらに残余、さらに残滓、さらに不滅の火の輝きも棄て去るのだ。ようやくここにいたって、火それ自体となってはじめて至聖なるものによって吸いとられ、火もまた吸いとられるがままになる。そのどちらもそのことに抗うことはない。」(H.104/5)

人間は至聖に近づくとき、人生を歩むときの靴も、個性を表現していた服も脱ぐのである。身につけているもやもやした発散物も見せかけも。

カフカがここで神秘主義のイメージ言語で語っている神はユダヤ教のエホバでもキリスト教の神でもなく、人知れず姿を隠した、把握不能な神秘主義者の隠れた神 (deus absconditus) である。つまり「至聖なるもの」である。また人間のなかの火とは本質的に至聖のものに近いものであろう。

人間は不壊なるもの、真の“Sein”を通じて至聖なるものと結びついている。旅装をして荷物を持った人間がこの火について、つまり自分のなかの謎のような不壊なるものについて何を知っているか？ カフカもまた天を仰ぎ、慰めと救いを求めて神の名をよびかけたことがあった。問いを発し、答を天に期待したことがあった。だが、いまでは至聖なるものとの対話がそれを与えてくれることを知っている。アフォリズム36は言う：「以前、私は理解できなかった。なぜ私の質問に答が与えられないのか。今日ではどうして質問ができるなどと考えることができたのか、理解できない。」(H.41)

カフカはアフォリズムを書いていた時期、先祖の信仰にも、キリスト教にも接近しなかった。「私はキルケゴールのようにキリスト教のすでに重く沈みゆく手によって生の中へ導き入れられることも、シオニストのようにユダヤの祈禱マントのひるがえっている裾をつかんでもいなかった。」

(H.121) 彼のなし得ることは(第三の)ノートに宗教についての懐疑をさまざまに書きつけるだけであった。ドグマの儀式と結びついた宗教にたいする不信感とは別に、カフカはユダヤ教、キリスト教が死に瀕している

ことを深く確信していた。「宗教はいずれも人間と同じく、道に迷っている」と第四のノートの中に書いている。(H.131)

この頃、神は死んだという噂が流れ、哲学者たちもそれを証明してみせた。神なしに生きることを快適と感ずる人たちはこれら哲学者たちの口真似をした。これに反し、カフカは神について極めて懐疑的ではあったが、不可知論者ではなかった。それは就中、次の点にあらわれている。彼はドグマチックなユダヤ教に距離をおいていたにもかかわらず、天地創造における神の存在を信じて疑わなかった。この人類のドラマの第一幕はカフカのアフォリズムのなかでも言及されている。その核心部分は墮罪の叙述である。八つ折版ノートおよび後期の省察においてもカフカはインテンシヴにアダムの墮落と、楽園からの追放に関わり続け、ミレナ宛の手紙のなかでもそれについて触れている。「ときどき私は他の誰よりも墮罪を理解していると思います。」(M.199)

「創世紀」の意味、あるいはそれと矛盾しないところでカフカは次のように思い描いている。即ち楽園のために創られた人間は永遠のなかで、時間を超えた外側で、生命の樹によって表現される真理にしたがって生きていくと。それはつまり、善悪の彼岸で、欲求も目標もなく、天真爛漫にという意味である。第四のノートには次のようなメモがある。「我われにとっては二種類の真理がある。それぞれ知恵の樹、および生命の樹によって表わされているもので、活動するものの真理と休息するものの真理である。前者においては善悪の区別がなされるが、後者は、それ自体が善そのものであり、したがってそこでは始めから善も悪もないことになる。」(H.109)

ここで善と悪という単語が登場しているが、カフカには悪についての独自の解釈がある。悪はカフカにとって神に逆って、永遠に善の邪魔をくわだてる力ではなく、ある種の視覚的な欺瞞の結果なのである。「存在しているのはただ精神的世界だけである。われわれが感覚的世界とよんでいるものは精神的世界における悪であり、そしてわれわれが悪とよんでいるものは、われわれの永遠の発展の一瞬間のひとつの必然性にすぎない。」

(A.54)

われわれは永遠に悪の網のなかへ陥るのではなく、永遠の発展の過程でほんの一瞬だけ悪のとりこになるという考え方は悪についてのカフカの基本的な考えである。ここから楽園への帰還の希望も生まれる。だがなぜ人間にとって帰還は成功しなかったか？

アフォリズム 3 は次のように述べている。「人間には二つの主たる罪がある。他の罪はいずれもそこから出ている。つまり性急と怠惰である。性急ゆえに楽園を追われ、怠惰ゆえに彼らは戻れない。だがひょっとすると、主たる罪は一つしかないのだ。つまり性急である。性急ゆえに彼らは追放され、性急ゆえに彼らは戻れない。」(H.39) 神と同等になろうとする人間の性急は人間になにをもたらしたか？ 楽園を追われた人間は善と悪の認識の能力において楽園の人間よりも優っている。しかし彼には彼の生を認識と一致させる能力はない。「誰も〔善と悪の〕認識だけでは満足できないで、その認識にしたがって行動しないではいられない。そのための力は人間には与えられていない。それゆえ、自分を破壊しないではいられない。みずからを危険にさらし、そうすることで必要な力を維持できなくなる。だがこの最後の試みをするしか残された道はない。」(H.102/103)

第三のノートの別のメモによれば楽園を追放された人間の死すべき運命は罰というよりもむしろ知恵の樹から食べるという禁を犯した当然の結果なのである。洞察を獲得したということは永遠の生命に近づく努力に際して人間を強め、人間の前に立ちはだかる障碍を克服するように仕向ける。しかしその道は自己破壊に通じている。「もしも〔知恵の樹からおまえが食べる〕ならば、死ななければならぬ！ という言葉の意味は、次のようなことだろう。認識は永遠の命に至るための階段であるとともに、それにたいする障碍でもある。おまえが知恵の樹の果実をたべて認識を得たのちに、永遠の生命にいきつこうと望むならば——そしておまえはそれを望むほかないのだ、なぜなら認識とはこの意欲なのであるから——おまえは階段を建設するために、障碍としての自己自身を破壊しなければならない——つまりこの建設はじつは破壊なのだ。楽園からの追放は、したがって

行為ではなく、ひとつのやむをえざる出来事であった。」(H.105/106)

自殺を拒否するカフカは自己破壊という言葉の意味を生きる意志の否定と理解する。第三のノートの終りにいう：「墮落の罪にたいしては三つの罰の可能性があった。第一は楽園からの追放、第二は楽園の破壊、そして第三の可能性は——これが最も残酷なものだが——永遠の生命を遮断し、それ以外の事はすべてなんらの変更もなく放置すること。」(H.105)

人間にとってもはや楽園の兄弟も居らず、楽園への帰還は拒まれている。1920年のアフォリズム<彼>にはこの考えを具体的に示した個所がある。「彼は、自分が生きることによってわれとわが道をさえぎるような感じがしている。そう思うと逆に、妨害されていることは、自分が生きている証拠だという気がしてくる」、そして次の言葉が続く。「彼自身の額が彼の道をふさいでいる。彼は、われとわが額に額を打ちつけて、血まみれになる。」(B.292)

ここにはカフカの受苦の思想がラディカルなかたちで示されている。生きる意志にたいする最も効果的な薬はカフカにとっては死を遂げたいと思わせる苦しみ (das Leiden) である。「苦しみはこの世界のポジティブな要素であり、それどころか、この現世とポジティブなものをつなぐ唯一のきずなである」(H.108) という。またこうもいう：「われわれ自身をめぐる一切の苦しみは、やはりわれわれが自分で悩み抜くしかなない。」(H.117)

このように「不壊なるもの」へ近づくための道をカフカは探し続けた。それは生きる基盤を求めての努力であった。だが、カフカには彼の疑問に答えてくれる信仰が欠けている。彼の視線は必然的に内面へ向うことになる。

三 荒野の放浪者

カフカは自分の内面を語るとき、これまで多用されてきたところ (Seele) という単語を避け、自己 (das Selbst)、あるいは内面世界 (die innere Welt) という言葉で書き換えている。第三のノートに次の言葉がある。

「ぼくの自己認識は、たとえば自室についてのぼくの知識と比較してなんと貧弱なことか。なぜか？外界の観察のような意味での内面世界の観察はあり得ない」(H.72)からである。続く文章では次のようにいう：「すくなくとも記述心理学は、ひとつのの神人同形説、強引な境界侵蝕である、と言ってまず間違いないであろう。内面世界はただ生きられるのみであって、これを記述することはできない。心理学は、天の鏡にうつった地上界の反射像の記述である。」(H.72)そして更にいう：「こころ(Seele)⁶⁾の観察者はこころの内奥にまでは立ち入ることができない。しかし外からかすかに触れる程度の、いわば外縁接触はあり得るだろう。この接触から得られる認識は、こころ自体もみづからについてなにも知らない、ということである。結局、こころは判らぬものとしてそっとしておくしかない。」

(H.93) この考え方からすると、こころの内奥へ立入って行くためには、われわれは反省的意識よりもより高度な認識器官を所有していなければならぬ、ということになる。カフカ自身、さまざまな不安、心理的抑圧に苦しんだが心理分析を受けようという考えはいだかなかつたようである。

カフカの晩年の恋人ミレナはカフカの不安と絶望的に戦った女性である。この二人の間には、カフカの不安が絶えず底流となって存在していた。その主たる理由のひとつは彼がユダヤ人であるところからきていた。ところでミレナの戦いの対象はもうひとつあった。病的ともいえる彼の潔癖感である。カフカは自分の生活が罪に汚れていると手紙で訴えるが、際限もないカフカの自身にたいする責めと墮落にたいする責任感をミレナは一種の熱狂と理解している。そしてカフカが彼女に、「ぼくは限りなく汚れています。際限もなく汚れているからこそかかる叫びをあげるのに純粹さをもってするのは。最も深い地獄にいる人間ほど純粹に歌う者はおりません」(M.208)というとき、ミレナは当然のことながらカフカの純潔への努力を病的と感じていた。

しかし罪の不安と、自分の地上の生活にたいして責任を負おうとする感情は、宗教的共同体という大地に錨をおろしたということなのであろう。

(M.246)

1911年以降、カフカは絶え間なくユードントゥームと関わり続けたが、宗教感情は前述したように稀薄であった。しかしいま疎遠と思われた宗教共同体の大地に錨をおろしたことはユダヤ人としての運命的必然であったように思われる。それは当時のプラハのユダヤ人をめぐる歴史的、社会的状況を考えれば容易に納得がいく。

カフカはプラハの哲学教授であったフランツ・ブレンターノの理論にしたがって、人間は洞察の力によって善と悪を認識できると信じていたが、この見解は墮罪についての聖書の教えと一致している。アフォリズム86はいう：「墮罪の罪以来、われわれは善と悪を認識する能力にかんしては、みんな本質的には似たりよったりである。…中略… だが真の相違は、この認識をこえたところでようやく始まるのである。…中略… だれも認識だけでは満足できず、この認識にしたがって行動するよう努めずにはいられない。しかし、そうするための力までは賦与されていないため、ここで自暴自棄におちいる。結果的にはかえって必要な力が得られなくなる危険があるにもかかわらず、自己を破壊することになる。実際のところ、この最後の試み以外に、どんな手だてが残っているだろう。…中略… ところが、いざ実行しようとする段になって恐ろしくなる。ここまできて自己破壊するくらいなら、むしろ善悪の認識を、墮落の罪以前にまでさかのぼって取消したいと思う。しかし、生じてしまったことは取消せず、せいぜい曖昧化してごまかせるだけである。そこでこの目的のために、さまざまな動機づけが発生し、それが世界中にみちあふれる。いやそれどころかこの可視的世界全体が、かたときの気休めを求める人間の、こうした動機づけのひとつにほかならないかもしれない。」(H.49/50)

われわれは獲得した認識から永遠の生への階段を建設しなければならぬが、それはわれわれ自身の破壊へと導くことになる。だがカフカは自殺は考えなかった。「私の強い自我こそいわば自己消尽のかたちで死ぬべきだ」(H.105)と考えていた。それはつまりこの世の中にあってこの世界を克服せんとする試みであって、カフカの場合、孤独な隠者の生活のような

(156)

ものが考えられていたわけでは決してない。

それは例えば結婚についてのカフカの考え方のなかにはっきり表れている。彼は結婚のために生れてきたとは感じていなかったが、未婚（Zölibat）のままに人生を送ることはあまりにラディカルで単純すぎる解決策だと考えていた。『父への手紙』のなかでは結婚、家庭生活、子供を育てる重要性について述べている。（H.209/210）結婚もまたカフカにとっては厳しい試練として甘受すべきものであった。しかしここでも彼のリゴリズムが災いし、「完全」に向けての努力が障害となる。彼は純潔を求め、みづからの道を神経質に清潔に保とうとする。ミレナ宛の手紙に表れている純潔への病的な努力はカフカの特徴的な性格である。彼の実生活は禁欲的の性格に規定されている。（M.182）

しかし一方でまたこの性格は彼の強い本能の動きと緊張関係にあり、禁欲は彼にあっては厳しい自己修養を意味している。

この頃になると、彼自身すでに、家庭生活にたいする諦念を運命づけられていると感じていた。それ故、彼の道が荒野を行く道だということが繰返し述べられる。

この旅人がオアシスに行き合うことは稀である。そしてそのオアシスすら彼にとっては、雑踏と無秩序、汚れと喧騒の支配する場であり、心の活力を生み出す憩いの場ではない。旅人はときどき荒野のなかで立ち寄り、いつ果てるとも知れない道に思いをめぐらす。彼の内部の神はいつまで永遠の神を探し求める旅に彼を駆りたてるのか？ 額の汗をぬぐうように、旅人がこの強迫観念をあっさり棄て去ってしまおうと考えても不思議ではない。「理論的には完全な幸せの可能性がある。不壊なるものを信じ、それへ向けて努力しないこと」とアフォリズム69はいう。ブロートに宛てた手紙のなかでもカフカは同じことを述べている。（Br.279/280）

この幸せの可能性はもちろんカフカにとっては純粹に理論の上でのことであり、その後も荒野のなかを歩き続けることになる。

カフカは時と共に掟やSchrift（聖書）の導きということ語るようになる。彼は先祖の宗教に信仰告白したこともなく、掟の支配する共同体の中

に生きたわけでもなかった。ディアスポラにある西ユダヤ人として距離を感じながらも、東ユダヤ人を愛していた。「何でも好きなものにしてやると言われたら東ユダヤの少年になることを望んだでしょう」(M.220)とミレナに書いている。しかしそれは実際には叶わぬ夢であり、彼は「一切を獲得しなければならなかった。現在も、未来も、そして過去も。これがひょっとするといちばん苦しい作業であるかも知れなかった。」(M.241) 彼にとってこの「過去」が生きた所有物となっていたならば、フェリーツェとの結婚をめぐる戦いも別の結果をもたらしていたかも知れない。しかし現実のカフカは、彼以外の人間との共同生活に堪えられるのか、文学の仕事が続けられるのか、という疑問をのりこえることができない。この出口なき状態から彼を救ってくれたものが他ならぬ病気、即ち結核であった。(1917年11月中旬のブロート宛の手紙も参照。) しかしこの出口は人生に希望をもてないまま、禁欲の道へ戻って行くことを意味した。荒野へひき返す道だけが眼の前にひろがっている。だが、すぐにこの道を行こうとはしない。最終的な使命を果す前に力を蓄える必要があった。「自分の意志で、まるで拳のように自分を振り回して、彼は世間を避けた。」(H.99) だがその後、彼のなかにまだカナの地が授けられるかも知れぬという新たな希望が湧く。日記、あるいはG. ヤノーホとの対話のなかでときどきカナの地が話題とされる。

前述したように第四のノートでは大地、大気、そして戒律の欠如が問題とされ、これを入手することがカフカの使命とされた。これらの欠如が彼の実生活でのあらゆる失敗と結びついていたという自覚があったからである。

ここに言われている大地は後にブロート宛の手紙のなかで述べられている「確固たるユダヤの大地」の意味に理解されるべきであろう。(Br.404) 「大気」は聖書の意味における「創造的な生の呼気」であり (Br.292)、戒律は掟の同義語である。

彼が探し求めているものは、自分の民族のなかで生きんとするときの基盤である。この課題実現のための前提条件を何ら身につけていなかった彼

はヘブライ語の勉強を始める。更に1919/20年にかけて二度目の結婚の試みも行なわれる。ユーリエ・ヴォホリゼクとの婚約である。彼女の父はユダヤ教団の小使いであり、彼女自身、シオニズムとの直接的接触もっていた。カフカは「いろいろ顧慮した末の婚約であり、その点では思慮分別のある結婚（Vernunfttheirat）ができあがったかも知れない」と述べている。（M.32）だが結局は肉体的にも精神的にも結婚の能力がないことを認識させられる。救いはまたしても諦めることであった。それでもなお彼はカナンへの希望を完全には放棄してはいなかった。

しかし死の二年前、1922年になると、カフカは無気味な認識に達する。つまり彼の道は出エジプト記の場合のように、エジプトから紅海や砂漠を経てカナンに通じているのではなく、逆の道をたどっているという認識である。彼は約束の地へ向って旅しているのではなく、彼が生れた40年前にカナンの地を出たのだ。まず家族と疎遠となり、それから次第に周囲の人間に対して自分を疎外し、ますます空気の稀薄な孤独のなかへ入っていったのであると。（T.406-408参照）

その後、カフカの最後の年月の伴侶となったドーラ・ディマントが短期間ではあったが、彼をもう一度人間世界へ連れ戻す手助けをした。

注

- 1) Felix Weltsch : Kafkas Aphorismen, Neue deutsche Hefte 1
(1954) S.307-312
- 2) Friedrich Beißner : Der Schacht von Babel, Stuttgart, 1963
- 3) Werner Hoffmann : Kafkas Aphorismen, Francke Verlag, Bern / München 1975
Werner Hoffmann : Ansturm gegen die letzte irdische Grenze,
Francke Verlag, Bern / München, 1984
- 4) Wunder-Rabbi : ユダヤ敬虔主義運動ハンディズムでは、敬虔な倫理的な生活を通じて誰でも「義人」—これをZaddikとよぶ—の段階に達することができる、と説く。人びとの間ではZaddikには奇蹟を行なう力があると信じられていた。このZaddikをドイツ語で言い換えたのがWunder-Rabbiである。信者の間ではカリスマ的権威をもつものであるらしい。

- 5) Wilhelm Emrich; Franz Kafka, Frankfurt/M, Athenaeum Verlag, 1965, S.55
- 6) Seele: ここではカフカの内面ではなく、一般論としての「こころ」を扱っており、Seeleが使われている。

カフカの作品は略語で示してある。

- B. Beschreibung eines Kampfes, NewYork, Schocken Books 1946.
- Br. Briefe, Frankfurt/M., S. Fischer 1966.
- F. Briefe an Felice, Frankfurt/M., S. fischer, 1967
- H. Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande, Frankfurt/M., S. Fischer 1966.
- M. Briefe an Milena, Frankfurt/M., S. Fischer, 1952.
- O. Briefe an Ottla, Frankfurt/M., S. Fischer, 1974.

なお、M.B.はMax Brodのカフカに関する著作。

Über Kafka: Franz Kafka, Eine Biographie; Franz Kafkas Glauben und Lehre; Verzweiflung und Erlösung im Werk Franz Kafkas, Frankfurt/M., S. Fischer 1966.